Kwansei Gakuin University

カナダ訪問記

―C・J・L・ベーツ第四代院長関係資料調査の旅―

池田裕子

Ⅰ　カナダ訪問のきっかけ〜ベーツ元院長の胸像の写真〜
Ⅱ　ベーツ元院長関係の資料について
1　アルバム
2　油彩画とエッチング
3　書簡
4　日記
5　もうひとつの「マスタリー・フォア・サービス」
6　胸像
7　家系図
8　関係者との懇談

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

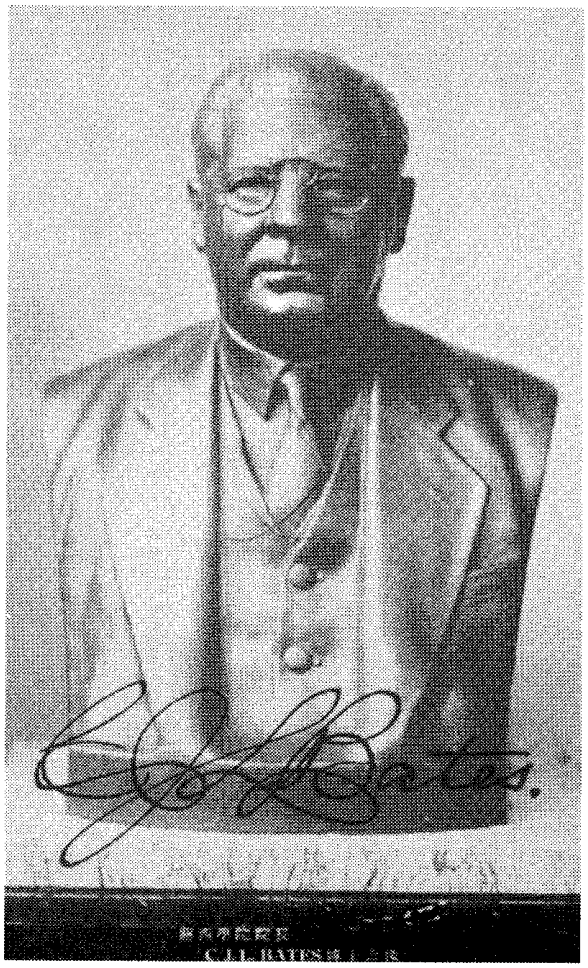
Ⅲ　その他の資料について
1　マウント・アリソン大学資料室
2　マリタイム地区カナダ合同教会資料室
3　カナダ合同教会資料室（トロント）とグェン・ノルマンさん
Ⅳ　終わりに
【参考文献】
【追　記】

Ⅰ　カナダ訪問のきっかけ～ベーツ元院長の胸像の写真～

ある日、ベーツ元院長（院長在任一九二〇－四〇年）の胸像の写真を見せられた。それは、創立七十周年の際に配られた書類[AD/8-2]と共に保存されていたもので、表にベーツ元院長のサインが書かれていた。どのような目的で作られ、配られた写真なのかはわからない。写っている胸像も見たことがない。時計台一階に置かれているベーツ元院長の胸像は一九七四年に作成されたもので、関西学院が創立七十周年を迎えた一九五九年には存在するはずもない。第一、顔の作りが違う。創立七十周年の式典に、ベーツ元院長は八〇歳を超える高齢をおしてカナダのトロントから参列されている。そのベーツ元院長が亡くなって三六年が経ち、その際同行されたご子息も既にこの世の人ではない。当時を知る本学の名誉教授にも写真を見ていただいたが、覚えがないとのことだった。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University



学院史資料室の資料庫には、創立以来の様々な資料が保管されているが、その中にベーツ元院長が所蔵していたアルバムの写真を複写したものがある。これは、国際センターの室長だった藤田允氏がベーツ元院長の長女ルルの長男、アルマン・デメストラル氏（ベーツ家家系図は「Ⅱ　7　家系図」参照）にお願いして、一九八八年に複写させていただいたものである。この写真の中に、ベーツ元院長の胸像を三方向から撮った写真が三枚セットで、一枚の台紙に貼られているものがあった。内一枚は、胸像の横にひとりの女性が立っている。撮影されたのは、おそらくベーツ館の庭で、一緒に写っている女性はベーツ夫人によく似ている。年代の記入はなく、写真が三枚あるからか、"The Three Busts" と書かれていた。その他に手がかりはないが、写っている胸像は七十周年の時の写真のものと同じように思われた。

さらに、ベーツ元院長の胸像について書かれたものはないかと探していると、木村禎橘氏が「関西学院高等学部創設時代」と題して『関西学院六十年史』（昭和二四年一〇月二九日発行）に書いた文章が見つかった。「……昭和一一（一九三六）年四月池田庄太郎（商第七回中退）その他地塩会有志諸君の醵金によりベーツ院長の小型胸像二基を大丸で作成し、一基はカナダ伝道局

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

に寄贈した。学院の分はベーツ記念館に備付けられ、伝道局の分はアウターブリッヂ教授戦前引き上げ帰国の際に託送した」。しかし、胸像の写真はなく、ここで説明されている胸像が前述の写真の胸像のことなのかどうかは確定できなかった。

とりあえず、こちらでわかっていることをまとめて、カナダに住む、ベーツ元院長のアルバムの現所有者であるアルマン・デメストラル氏に問い合わせてみることにした。アルマン・デメストラル氏とは一面識もなかったが、カナダのモントリオールにあるマギル大学法学部教授で、本学と交流協定を締結するきっかけを作ってくださった方である。私からの手紙に対してデメストラル氏は、写真の女性はベーツ元院長の長女（デメストラル氏の母親）であり、地塩会の胸像が作られた一九三六年には日本にいて、カナディアン・アカデミーの教師をしていたことを教えてくださった。しかし、胸像自体は見たことがないので、身内の中で最長老である伯母（ベーツ元院長の三男の妻）に尋ねてみると約束してくださった。

デメストラル氏からの情報により、写真の胸像は地塩会作成のものにほぼ間違いないことがわかった。ということは、ベーツ元院長の胸像は、一基はカナダに、一基はベーツ館に置いてあり、"The Three Busts" と題された写真は、胸像が作成されてすぐ、ベーツ館の庭で撮影されたということになる。カナダに送られた胸像はデメストラル氏にその調査を依頼しているが、ベーツ館に置かれているはずのもう一基は、もはやベーツ館にはない。学内のどこかにあるはずなので、これは学内の人に尋ねてみるしかないだろう。

数週間後、デメストラル氏より、胸像が見つかったとの連絡がはいった。その胸像には "Presented to Dr. C. J. L. Bates by his Japanese friends, April 1936" と彫ってあり、ト

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ロントに住むスコット・ベーツ氏（ベーツ元院長の三男の孫）が所有しているそうである。そして、ベーツ元院長に興味があるなら、資料等の調査に来るように言ってくださった。一枚の写真に対する疑問からこんなことになるとは思ってもみなかったが、かつてベーツ元院長のトロントの自宅を訪れた卒業生達は、家の中は日本や関学の物で一杯だったという文章を『母校通信』に書いている。いったいどんなものを持っておられたのか興味がある。『関西学院百年史』が完成した今、新たな資料調査が必要になっているとの判断から、山内一郎院長や山本栄一学院史資料室長と相談して、一九九九年九月二四日より一〇月五日までカナダに行かせてもらうことになった。以下は今回の訪問地、トロント（オンタリオ州）、モントリオール（ケベック州）、サックビル（ニュー・ブランズウィック州）で確認することのできた資料等に関する報告である。

Ⅱ　ベーツ元院長関係の資料について

1　アルバム

ベーツ元院長は一九〇二年にカナダで結婚後、来日した。その際、カメラを持参したと思われる。来日前の写真は写真館で撮影されたようなものが中心であるのに対し、来日後は数多くの写真を撮影し、一〇冊以上のアルバムに整理している。ベーツ元院長には四人の子供がいて、遺品も四人で分けたということだが、アルバムは長女ルルが譲り受けた。そして長女ルル死亡後は、その長男アルマン・デメストラル氏により大切に保管されている。

アルバムの表紙や綴じ紐等はかなり痛んできているが、中の写真は鮮明である。写真は、おお

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

むね年代順に貼られ、簡単な説明が付けられていることが多い。撮影の都度アルバムに整理されたように思えるが、後からまとめて貼られたような箇所もある。説明は写真自体に書き込まれていたり、黒い台紙に白い文字で書き込まれていたりする。白い文字は薄くなっている部分もあって、複写は困難と思われる。一般に、写真というのは説明がないと判断に困るものであるが、ベーツ元院長のアルバムには年代、場所等の書き込みがかなりある。ある意味で日記のような役割を果たしていると言える。

写っているのは主に家族、知人、訪問先、関学の建物、学校行事等であるが、植物を中心にとらえて建物を写すなど、かなり構図に凝ったものやソフトフォーカスのものもある。また、自らの病床の様子を写すなど、記録ということを意識して撮影していたこともわかる。さらに、明治天皇や大正天皇の写真や英国王室の写真も貼られていた。

本学に関係する写真は既に、一九八八年に複写させてもらっているが、今回、幼少時代や大学時代の写真を見ることができた。幼少時代の写真は、これらアルバムとは別に、チャールズ・デメストラル氏（アルマン・デメストラル氏の弟）が所有しており、普通の紙焼きではなく、金属板に焼き付けてあった。一八七〇年代後半のものと思われる。私は最初、銀板写真ではないかと思ったが、日本写真学会画像保存研究会編『写真の保存・展示・修復』（一九九六年五月二〇日発行）三二頁の「一九世紀の写真方式」によると、銀板写真が主に使用されていたのは一八六〇年代までとなっている。一九世紀は様々な写真方式が試みられた時代であり、専門家が見ればはっきりとしたことがわかるだろう。その他に、ベーツ元院長の両親、兄弟、祖父母の写真もあって、ベーツ元院長の生涯を知る上で貴重なものである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

アルバムの表紙にはベーツ元院長の手によると思われる次のような表書きがある。以下の一二冊以外に、家族以外の結婚式の写真だけを集めたアルバムもあった。その中に、卒業生が贈った写真もあり、それらも大切に保管されていたことがわかる。

- Family Bates (before/after 1902)
- 1902/12 Japan & Canada
- 1902/13
- 1902/20
- 1921/7
- 1924/8
- 1928/31
- 1931/5
- 1935/8
- 1938/40
- 1940/45
- 1955/6

2　油彩画とエッチング

本学にはベーツ元院長による六号サイズの油彩画［PL/2/BCJL］が一枚ある。宮島の風景を描いたもので、明るい色使いの美しい作品である。絵自体にはベーツ元院長の署名もなく、裏に説明書きもないが、学院史資料カードに「宮島/Bates,C.J.L.画　1986.09　D・E・ウッズウォース教授（H・F・ウッズウォース元法文学部長令息）寄贈」という記述がある。カナダ訪問にあたり、デメストラル氏にベーツ元院長の描いた絵があるかどうか問い合わせたところ、「印象画風の油絵」が何点かあるとの回答を得た。昔はたくさんあったが、皆で分けたため散逸してしまったようである。

モントリオールのアルマン・デメストラル氏とその弟チャールズ・デメストラル氏により保管されていたベーツ元院長の油彩画は三点あった。どれも本人によるサインも説明書きもない。内

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

一点は日本の風景を描いたもので、高山（現在の宮城県塩竈市七ケ浜町）の海岸であることがわかった（『資料室便り』一〇号（一九九九年一二月三日発行）に掲載）。もう一点は今のところ、どこの景色か思い当たらない。残る一点は作風が今まで見たものとは少し異なっていた。絵の裏には、ベーツ元院長の娘婿、クロード・デメストラル氏によるフランス語の説明が付いている。説明によると、一九四二年に描かれたもので、タイトルは「ケベックの冬」とある。ベーツ元院長が戦争のため日本を引き揚げたのが一九四〇年一二月末なので、その次の冬、すなわち日米開戦後に描かれたものと思われる。雪景色の山と木と家の絵である。今までになく寂しい感じのする絵だが、不思議なことに私には凍りつくような寒い冬を見守る作者の暖かい眼差しが感じられた。愛する日本とカナダが敵味方となった時代のベーツ元院長の苦悩を思わずにはいられない作品である。ついでながら、この当時のベーツ元院長の胸の内を知る資料としては、一九四二年にカナダのラジオ放送で、ベーツ元院長自らが愛する日本のために語った“Understanding Japan”というタイトルのスピーチ原稿［AA/2/BCJL］が残っている。これは、一九八九年に、アルマン・デメストラル氏が遺品の中から見つけ出して、送ってくださったものである。

ところで、今よりもはるかに学生数の少なかった戦前の関西学院のキャンパスにおいて、皆に尊敬され、慕われている院長自身が絵筆を取る姿は、学生達にどんな影響を与えたことだろうか。ベーツ元院長が残したアルバムの中には、キャンパスでイーゼルを立て絵を描くベーツ院長とそれを見守る学生達を写した写真も残っている。「1　アルバム」の項でも指摘したように、ベーツ元院長には絵画や写真に対する特別なセンスと興味と理解があったように思われる。戦前の弦月会を始め、この分野における学生、卒業生の活発な活動が改めて思い起こされるのである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

昨年、神戸市立小磯記念美術館より、特別展開催にあたり、本学卒業の版画家、神原浩氏と北村今三氏に関する問い合わせを受けた。神原氏については、その作品を何点か所蔵していたので特別展のため貸し出すことになったのだが、今回のカナダ訪問で、本学にもなかった神原氏の作品をベーツ元院長の遺品の中に見出すことができた。そのエッチングには、“Afternoon at Uegahara, near Nishinomiya H.Kambara 7/30”と記入されていた。同美術館作成の「神原浩年譜」(『特別展川西英と神戸の版画－三紅会に集った人々』(一九九九年一〇月七日発行))によると、一九三七年一一月に行われた第六回日本版画協会展に出品された作品の中に『上ケ原高地の午後』というのがあるが、これがそうではないだろうか。こちらで見つからなかった作品にモントリオールで出会うことになろうとは思いもしなかった。本学が所蔵しているエッチングは、紙が焼けてかなり変色しているものが多いのに対して、保存状態も良いように見受けられた。神原氏に関しては、この他二点の作品が遺品の中にあった。

実は、神原氏はベーツ元院長との関わりが深く、『関西学院高等商業学部同窓会会報』第二〇号(一九三七年九月発行)[CE/7]に次のような文を寄せている。「……当時中学部を卒業して、東京の本郷研究所に絵を修行に行っていた私、中学部を卒業して同志社に行っていた坂野君等が『エヲカイテモカマイマセン』と云うベーツさんのお言葉に甘えてノコノコと原田の森に帰り、高商の二回生として入学させてもらったのです」。また、ベーツ元院長は「絵を描くビジネスマン、大いに結構」と高商の学生に語ったとも言われている。なお、神原氏をめぐる話は別稿で、神戸市立小磯記念美術館学芸員金井紀子さんに書いていただいている。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

3　書簡

今回カナダで、ベーツ元院長が娘のルルおよびその家族に宛てた書簡と、日本から卒業生や教職員がベーツ元院長に送った書簡を見ることができた。

娘ルルおよびその家族宛の書簡は、モントリオールのチャールズ・デメストラル氏（娘ルルの次男）により保管されていた。百通以上の書簡は全てベーツ元院長自身による手書きである。娘に宛てた私信が手書きなのは当然かもしれないが、ベーツ元院長はタイプライターによる手紙は失礼に当たると考えていたと思われる。院長在職時、米国に帰られたニュートン前院長に宛てた書簡のコピーが数通、学院史資料室に保管されている［AB/B/1/1］。その中にタイプライターを使ったものがある。その手紙の中で、ベーツ院長はタイプライターを使う失礼をニュートン前院長に詫びている。

今回の報告の主旨からはずれるが、ニュートン第三代院長（院長在任一九一六―二〇年）宛の書簡は、発見された総数こそ少ないものの、時の院長が前院長に宛てた書簡（正確には院長就任前の書簡も含まれている）という意味で、関西学院にとって非常に重要なものであると思う。その内の何通かは、初代学院史資料室長の小林信雄名誉教授が一九七〇年代に米国ノース・カロライナ州レイク・ジュナラスカで発見し、コピーを持ち帰ったものである。また、山内一郎院長が米国デューク大学で発見し、一九七八年にマイクロフィルムの形で入手した膨大なニュートン・コレクションの中にも興味深い書簡が何点か含まれている。これらの書簡から、カナダ人のベーツ院長がアメリカ人のニュートン前院長を敬い、プライベートなことから仕事のことまで書き送っていたことがわかる。『関西学院六十年史』（一九四九年一〇月二九日発行）に西川玉之助氏が書

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

いている文章の中に「……それに加えて加美・南美両派の隠然たる勢力争いもあり、時には確執の衝突もあり、常に虚々実々の外交戦が演ぜられ、昔のような他人交えぬ和やかさは望むべくもなかった。幸いにベーツ博士の偉大なる政治力あって、漸く平和が保たれ……」とある。前任者を敬うベーツ元院長の態度、姿勢が、この困難な時代に関係者の心をひとつにまとめあげることのできた大きな要因であることは、ベーツ元院長の書簡からも想像されるのである。

ベーツ元院長から娘宛の書簡は、切手の部分が切り取られていることが多いが、多くは封筒も一緒に保存されている。切手部分がなく、消印から日付を読みとることができなくても、ほとんどの手紙自体に年月日が書かれているため問題はない。筆圧も強く、美しい筆記体で、最晩年のもの以外は比較的読みやすい。年毎の書簡数をまとめると次のようになる。

・ベーツ元院長から娘ルルおよびその家族宛書簡（計一三〇通）

一九四〇年	一通	一九五四年	一九通
一九六一年	三通	四八年	一通
五五年	一一通	六二年	一通
五〇年	一通	五六年	一四通
六三年	三通	五一年	五通
五七年	八通	不明	五通
五二年	一九通	五八年	九通
五三年	二五通	五九年	五通

・その他の書簡　二六通

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ほとんどが、日本を去ってからの書簡で、トロントでのベーツ元院長の生活ぶりを読みとることができる。娘宛に日本語（ローマ字）で書き出している書簡もある。また、過去の自分を思い出して書いているものもあり、注意深く読んでいくと色々なことがわかりそうである。今回、全ての書簡をお借りすることができたので、コピーを取って学院史資料室に保管しておきたいと考えている。ちなみに、一九四〇年に院長辞任が承認された時の模様を娘夫婦に書き送った書簡については、『資料室便り』一〇号（一九九九年一二月三日発行）に全文と抄訳を掲載した。

一方、日本から送られたベーツ元院長宛書簡は、トロントのスコット・ベーツ氏（ベーツ元院長の三男の孫）により保管されていた。ハガキ、封書ともかなりの数があって、ベーツ元院長が日本からの手紙類を大切にしていたことがよくわかる。現地で全てに目を通す時間もなく、スコット・ベーツ氏の方で複写して送ると申し出てくださったため、お借りすることはできなかった。したがって、詳細は今回報告できないが、差出人の中には、今田恵、寿岳文章、小林信雄等の名前があった。卒業生からと思われる手紙にはローマ字で書かれたものもあった。「ベーツ先生からお手紙をいただいて感激した」という書き出しの手紙が何通も見受けられた。

また、モントリオールのアルマン・デメストラル氏宅には、日本からのクリスマスカードばかりを集めたファイルがあった。

4　日記

今回の訪問にあたり、ロバート・ベーツ氏（ベーツ元院長の三男）による *Newcomers in a New Land*（一九八八年一〇月発行）[AA/2/BCJL] を読んだ。ベーツ家のカナダにおける歴史

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

をまとめた小冊子である。その中にベーツ元院長が日記を書いていたと思われる表現があった。短い期間でも日記が書かれ、しかもそれが残されていれば、何よりの資料になる。

トロントのスコット・ベーツ氏宅に、“Guidance Book & Diary”とベーツ元院長が書いた紙の束があった。小さい紙片（大きさ164㎜×96㎜）に太いペン先で小さな文字がぎっしり書き込まれている。一見したところ、読めそうにもない文字だが、確かにベーツ元院長の筆跡と思われる。一番古い日付は一九三五年七月一日で、一九四一年頃までの紙片があった。紙片は糸で綴じてあったり、綴じてなかったりで、順番を確認しながら読み進めていくのは至難の業に思えた。ちなみに、比較的読みやすかった一九四〇年一二月三一日の日記は、カナダ帰国のため、神戸港を出港して横浜へ向かう船上で書かれている。

見つかった日記がベーツ元院長の日記の全てかどうかはわからない。戦争に向かう特殊な時代だっただけに、一九三五年から数年間だけ日記をつけていたとも考えられる。他の時代の日記は別の遺族が保管している可能性もある。あるいは、個人的なものなので、ベーツ元院長が処分してしまっているかもしれない。ただ、私が *Newcomers in a New Land* を読んで、日記があるのではないかと思ったのは一九〇九年から一〇年にかけての時代である。この時代のものも、ひょっとしたら紙片の束の中に紛れ込んでいるかもしれない。日記は、今年の一月になって、スコット・ベーツ氏からお借りすることができた。中を確認しながら複写をとってお返しする予定である。

Newcomers in a New Land を書いたロバート・ベーツ氏は、ベーツ元院長の日記を所有するスコット・ベーツ氏の祖父で、一九九三年に亡くなった。その後、ロバート・ベーツ氏の妻はベーツ元院長関係の遺品をすべて日本贔屓のこの孫に譲ったそうである。実際、スコット・ベー

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ツ氏の目元は曾祖父ベーツ元院長にそっくりで、一〇年以上前、学生時代のスコット・ベーツ氏が来日した際、「原田の森会」でも話題になったと聞いている。スコット・ベーツ氏は日本で生まれ育った祖父から日本や関西学院や曾祖父の話を聞いて、興味を持つようになり、ついには学生時代日本に数ヶ月滞在するに及んだ。また、その妻も結婚前日本で二年間英語を教えていたそうである。ベーツ元院長の影響はその曾孫の代にまで及んでいるのである。

5　もうひとつの「マスタリー・フォア・サービス」

モントリオールのマギル大学は、ベーツ元院長が一八九四年から九七年までの三年間学んだ大学である。ベーツ元院長の履歴書の学歴欄は、通常、一九〇一年にカナダのクィーンズ大学で修士号を取得したという記述から始まっている。他の宣教師の学歴は、学部の卒業から記入されているのに、ベーツ元院長はなぜ修士号からしか書いていないのだろうか。ベーツ元院長自身、マギル大学で三年間学んだと書き残しているし、マギル大学で勉強に使ったと思われる本も学院史資料室の資料庫に残されているのに……。

今回、モントリオールでマギル大学資料室を訪れ、ベーツ元院長の在学記録を調べてみたいと思った。履歴書等にマギル大学の記述がない理由が明らかになるだろうと考えたからである。百年以上も前の在学記録について、資料室の職員がどのように対応してくれるかということにも興味があった。この調査のため、九月二九日の午後、アルマン・デメストラル氏は私をマギル大学資料室のゴードン・バー氏に紹介してくださった。

マギル大学資料室では、まず卒業生リストを調べた。ベーツ元院長の名前はなかった。次に当

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

時の学内刊行物や学内新聞等の記事索引で名前を探すように言われた。クラブ活動や勉学等で目立った活躍をしていれば、何らかの記事になっている可能性が高いからである。しかし、ここにも名前はなかった。最後にバー氏は、*Annual Calendar of McGill College and University* を調べて、ベーツ元院長の名を見つけ出してくれた。これは、毎年発行されていて、セッション毎の登録者氏名やその年の入試問題が掲載されている。ベーツ元院長の名は、一八九四〜九五年には一年生、一八九五〜九六年には二年生、一八九六〜九七年には三年生の所に載っていた。確かに三年間在籍している。さらにパーシャル・スチューデントとして一九〇一〜〇二年の三年生の所にも名前があった。結局、三年間登録されているが、卒業はしなかったという事実が確認できた。卒業せずにマギル大学を去ったのは、一八九七年五月に、メソヂスト教会オタワ地区モントリオール年会の牧師として承認され、ブラインド・リバーに派遣されることになったからだと思われる。ブラインド・リバーはモントリオール年会の最も端に位置していたため、大学に通い続けることができなかったのであろう。

実は、バー氏との会話の中で、何らかの手がかりになればと思い、ベーツ元院長と関西学院との関わりについて説明しながら名刺を差し出したところ、思いがけないことがわかった。

バー氏「C・J・L・ベーツが関西学院でマスタリー・フォア・サービスというスクール・モットーを提唱したんですか？　マクドナルド・カレッジのスクール・モットーもマスタリー・フォア・サービスですよ。」

私　「え？　何とおっしゃいましたか？　マスター・フォア・サービスですか？」

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

バー氏「マスタリー・フォア・サービス。関西学院と全く同じスクール・モットーです。」

そういえば、小林信雄名誉教授から、「ベーツ元院長が一九一二年に提唱した『マスタリー・フォア・サービス』というスクール・モットーは全くのオリジナルではないらしいが、どこがその元であるかはわからない」という話を聞いたことがある。早速、バー氏の助けを借りて、マクドナルド・カレッジのスクール・モットーに関する資料に当たってみることにした。

マギル大学マクドナルド・カレッジは、メイン・キャンパスから四〇キロ程離れたところにある、農業・環境科学部を中心としたキャンパスである。*Macdonald College of McGill University 1907-1988: A Profile of a Campus* によると、一九〇七年にモントリオールの実業家ウィリアム・マクドナルド卿（一八三一～一九一七年）が出資し、農学部と家政学部と教育学部を作ったとなっている。出資の際、マクドナルド卿は、何か将来の発展につながるものをということで、「マスタリー・フォア・サービス」というスクール・モットーを提案したらしい。一九〇七年（ホームページでは一九〇六年となっている）の創設と同時にスクール・モットーが提案されたとすると、本学より五年も早いことになる。

一方のベーツ元院長は、一九〇七年当時、既に来日しているが、関西学院の存在はまだ意識していない。ベーツ元院長が初めて関西学院を意識したのは、一九〇八年夏、軽井沢において、マシューズ氏と関西学院に対するカナダメソヂスト教会の経営参加の可能性について話し合った時である（"Reminiscences of Kwansei Gakuin Forty Years Ago and Since" by C. J. L. Bates『関西学院六十年史』（一九四九年一〇月二九日発行）より）。その後、一九〇九年から一

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

〇年にかけて、ベーツ元院長一家は休暇のため日本を発ち、シベリア鉄道経由でヨーロッパに渡った。ヨーロッパから北米に回った一家はモントリオールに立ち寄り、マギル大学を訪れている。その証拠に、ベーツ元院長のアルバムの中には、マギル大学キャンパスで子供達を撮った写真が残されている。そこで、創設されたばかりのマクドナルド・カレッジやそのスクール・モットーの話を聞いたのではないだろうか。ベーツ元院長の関西学院着任は、一九一〇年九月一〇日のことである。

別の可能性として、ベーツ元院長がマギル大学を訪問した際、新キャンパスはできていたが、スクール・モットーはまだ提案されていなかったということも考えられる。日本伝道より休暇で帰国したベーツ元院長に、マクドナルド卿がアイデアを求めて相談したということも考えられる。また、一九〇七年の創設と同時にスクール・モットーが提案されたとしても、マクドナルド卿とベーツ元院長が昔からの知り合いであれば、日本で宣教師として活躍中のベーツ元院長に何かいいスクール・モットーはないかと書簡等により相談があった可能性も考えられないわけではない。「4　日記」の項でも触れたように、一九〇九〜一〇年の日記がみつかれば、もう少しはっきりしたことが言えるかもしれない。あるいは、マクドナルド・カレッジのスクール・モットー提案時の状況がわかる資料、当時の大学新聞やマクドナルド卿の書き残したもの等も検証してみたい。バー氏にも協力を求めているので、マギル大学側の資料の提示にも期待したい。

さらにこの件については、内田政秀名誉教授が指摘するように、もっと大局的に、カナダメソヂストの歴史、あるいはもっと広く、北米におけるキリスト教の歩みの中で捉えるという視点を忘れてはならない。同名誉教授は、「建学の精神について・試見」（『キリスト教主義教育研究室

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

年報』一六号（一九八八年一一月発行）[B1/7]という論文の中で次のように書いている。「このように見てみると学院のモットーもただその一言があるのではなく、その時代のカナダのキリスト教のエートスからおし出されて結晶したもの、と思われる」。

ところで、モントリオールは、バンクリークヒル高校（モントリオールとオタワの中間に位置する）出身のベーツ元院長にとって、初めての都会である。デメストラル氏は、私に一九〇〇年頃のモントリオールの写真を見せた後、マギル大学のキャンパスを案内し、ベーツ元院長在学時からあった建物を示してくださった。現在のマギル大学キャンパスに立ち、そこから百年の時を消し去った時、そこに私が見たのは関西学院上ケ原キャンパスであった。デメストラル氏も一九八八年に、祖父や母親から何度も聞いていた関西学院を訪れた時、マギル大学のキャンパスと似ているのに驚いたそうである。

言うまでもなく、関西学院上ケ原キャンパスは、ウィリアム・メリル・ヴォーリズ氏による設計である。奇しくも、ベーツ元院長とヴォーリズ氏は、一九〇二年に全米各地から五千名もの参加者を集めてトロントのマッセイ・ホールで開催された、海外伝道学生奉仕団に共に参加している。当時モントリオールで神学を学んでいたベーツ元院長と、米国のコロラド大学で建築を学んでいたヴォーリズ氏は、お互いを知らぬまま、この集会参加を契機に海外伝道を決意するのである。ベーツ元院長は中国を、ヴォーリズ氏は今まで宣教師の行ったことのない場所を希望し、共に日本に派遣されることになる。やがて、二人は日本で出会い、関西学院上ケ原キャンパスが誕生した。ベーツ元院長の次男C・J・L・ベーツ・ジュニア氏（『クレセント』第三巻五号（一九七九年九月二八日発行）[A/5]では長男となっているが、次男が正しい）は、本学の創立九十

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

周年に寄せて、前述の『クレセント』に「神戸、関学そして父」という文章を寄せている。「……私はメリル・ヴォーリス博士のペン先から流れ出る優れた技術による図面と、建設業者の竹中さんの建設的な助言をよく覚えている」。

ベーツ元院長は、創立七十周年の式典参列のため来日したおりに、病床のヴォーリズ氏を見舞っている。上ケ原キャンパス設計時に二人がどのような会話をかわしたかはわからない。しかし、ベーツ元院長が上ケ原キャンパスの中に、自分が最も多感な時を過ごした、なつかしいマギル大学キャンパスを見ていたことは間違いないように思われる。「マスタリー・フォア・サービス」もそのひとつの表れかもしれない。

6　胸像

今回の出張の発端となった胸像は、トロントのスコット・ベーツ氏宅で確認することができた。この胸像は、「4　日記」の項でも述べたように、他の遺品と共に、祖父ロバート・ベーツ氏死去の際に譲られたものである。では、なぜこの胸像をロバート・ベーツ氏が所有していたのだろうか。

実は、前述した資料の他に、出発前に日本でもうひとつ重要な資料を目にしていたのである。それは、一九八七年三月二七日にバーナード・エナルズ氏によって書かれた論文 “The Contribution of Dr. C. J. L. Bates to Royal York Road United Church, Toronto” [AA/2/BCJL] で、その最後の部分にベーツ元院長の胸像のことが書いてあるのに気付いていた。トロントのロイヤル・ヨーク・ロード合同教会は、ベーツ元院長がその晩年を過ごした教会である。バーナー

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ド・エナルズ氏はベーツ元院長が亡くなった時、この教会の牧師であった関係で、一九六三年にベーツ元院長の葬式を執り行っている。エナルズ氏はベーツ元院長の胸像を次のように記述している。「……教会には、かつて海外伝道局の所有していたブロンズの胸像もある。胸像には次のように書かれている。『C・J・L・ベーツ、関西学院院長。関西学院での二五年間の教育的働きを記念して。当ブロンズ製の胸像は日本の友人より、カナダ合同教会海外伝道局に贈られた。一九三六年四月、日本、大阪』さらにC・J・L・ベーツの署名と一九三五年一二月一四日の日付がある」。

地塩会（高等学部商科（一九二一年より高等商業学部）の大正時代卒業生を中心とする会）が一九三六年に作成した二基の胸像の内一基は木村禎橘氏の記述（「I　カナダ訪問のきっかけ」参照）通り、確かにカナダの伝道局に託送されていた。伝道局からロイヤル・ヨーク・ロード合同教会に移された時期と理由はわからない。しかし、少なくとも一九八七年まではロイヤル・ヨーク・ロード合同教会に設置されていたのである。スコット・ベーツ氏によると、カナダ合同教会牧師として長年貢献してきた祖父のロバート・ベーツ氏は、その引退に当たり、何か記念に欲しいものはないかと聞かれ、ロイヤル・ヨーク・ロード合同教会にある父親の胸像を所望したそうである。

胸像は高さ三五センチ程度の小さなものである。かつて胸像がかけていたメガネは既に残っていなかったが、裏面にバーナード・エナルズ氏が書いているのと同じ説明書きが彫ってあった。その他に日本語で、「立体写真像　発明者盛岡勇夫作」と書かれている。

ところで、今回の出張の発端となったのは、正確に言うと、胸像というよりも、それを写した

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

写真なのであるが、何のために七十周年の時の書類の中にこの胸像の写真がベーツ元院長のサイン入りではいっていたのだろうか。実は、先に訪れたモントリオールのアルマン・デメストラル氏宅で見たアルバムの中に、同じ写真でサインのないものが貼られているのに気が付いた。サインがない代わりに、胸像の裏に彫ってあるのと同じ文章を付けてプリントされていた。また、写真にサインも説明もないものがトロントのカナダ合同教会資料室にも保管されているのを見つけた。写真の裏には手書きで“Bronze Bust of Dr. C. J. L. Bates Height 1 foot 2 in.”と記入されていた。さらに、神崎驥一第五代院長（院長在任一九四〇－五〇年）のアルバム［PA/10］の中に、この写真を絵はがきに加工したものが残されていることもわかった。結局、同じ写真に四通りの細工をほどこしたものがみつかったわけである。

さて、一九三六年に作られ、ベーツ館に備えつけられることになっていたもう一方の胸像は、現在、学院本部秘書室の応接室に置かれていることが判明した。いつ、どういう理由で、ベーツ館から秘書室に移されたのかはわからない。『母校通信』五号（一九五〇年一〇月発行）［CE/7］によると、一九五〇年六月一七日にはベーツ館でベーツ元院長の胸像を前にして座談会が行われている。ところが、一九六八年三月の卒業アルバム［PA/5-4］では、院長室で小宮孝第九代院長（院長在任一九五八－六九年）を撮った写真に、偶然この小胸像が写っている。この時点で既にベーツ館から移されているのである。

実は、関西学院にはこの小胸像よりもう一回り大きい胸像とその台座がある。それは宗教センターのベーツ・ホールに置かれていて（一九六五年にベーツ・ホールができるまでは、院長室に置かれていた）、胸像と台座の裏にベーツ元院長の一九四〇年までの経歴が書かれている。そし

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

て、台座には「池田庄太郎寄贈」の札がついている。一九三六年に地塩会有志と共に小胸像二基を作ったのも池田庄太郎氏である（「Ⅰ　カナダ訪問のきっかけ」参照）。第三の胸像に院長辞任までの経歴が書かれているということから考えて、池田氏は、ベーツ院長辞任の際（一九四〇年）、または創立七十周年（一九五九年）を記念して、もう一度胸像を作成して、学院に寄贈したのではないだろうか。第三の胸像は、大きさこそ異なるものの、一九三六年作成の二基の小胸像と全く同じ作りである。七十周年の時の書類と一緒に保存されている写真には、この第三の胸像の台座の一部も写っているので、写真自体は後で作られた胸像を撮影したものと思われる。とにかく、創立七十周年を記念してベーツ元院長の胸像が再び寄贈されたか、少なくとも、既にあった胸像の写真が配られたのであろう。

一九四〇年一二月にベーツ元院長が日本を去ることになった時、ベーツ館はベーツ元院長が使っていたまま保存されることが決まったようである。『関西学院同窓会報』第四巻第六号（一九四一年二月二〇日発行）［CE/7］に神崎驥一院長の挨拶として次のような文章が掲載されている。

「……ミッションの好意ある了解を得て、先生が最後まで住して居られた住宅を『ベーツ記念館』として保存し、且利用する事となりました。此の計画に対し、同窓会の寄せられたる御協力に対しては、深甚たる謝意を表するものであります。記念館はいずれ同窓諸君にも利用していただけることになると思います」。同じ号で同窓会幹事長の亀徳一男氏もベーツ館について述べている。

「……ベーツ記念館管理の責任は学院にありますが、之は広く同窓にも開放されます。閑を得て母校を訪れてはいかが。ベーツ記念館に宿りて先生の俤を偲び学窓時代を夢みるなど愉快ではありませんか」。後年、ベーツ館が国際センター事務室として使われているのを知った卒業生から

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

「ベーツ館よ何処」という一文が『母校通信』七八号（一九八七年秋）[CE/7]に寄せられたことがある。「終戦後、宣教師住宅の一番館がベーツ元院長をしのぶ建物として、中の什器類もそのままに保存されたと聞いていました。（略）ところが、いつの間にか、インターナショナル・センターという表札が掛けられ、他の目的に使用されているらしいのです。同志社や慶応など、学校の大切な遺産（資料）の永久保存には、細心の注意が払われているとか。同窓諸君はどうお考えでしょう（山川学三郎、昭一六・文専英文）」。現在はさらに手が加えられ、外観はともかく、その室内にベーツ元院長が住んでいた頃のおもかげがどの程度残っているか疑問である。ベーツ元院長が惜しまれつつ関西学院を去って六〇年、これも時の流れだろうか。

7　家系図

ベーツ家のカナダでの歴史は、一八二七年に一六歳のナサニエル・ベーツ（ベーツ元院長の祖父）がアイルランドのウェクスフォードから移住して来たことに始まる。この歴史は、「4　日記」の項でも述べたように、ロバート・ベーツ氏（ベーツ元院長の三男）により *Newcomers in a New Land*（一九八八年一〇月発行）という小冊子［AA/2/BCJL］にまとめられている。この小冊子は、創立百周年記念式典参列のため関西学院を訪れたロバート・ベーツ氏自身により、創立七十周年の時に関西学院からベーツ元院長に贈られた名誉博士学位記［S/2/BCJL］等と共に関西学院に寄贈された。

小冊子の序文によれば、ロバート・ベーツ氏がこの原稿を書き始めたのは、一九三五年夏のことであった。前年母親が脳溢血で倒れたことから、ベーツ元院長は、既にカナディアン・アカデ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

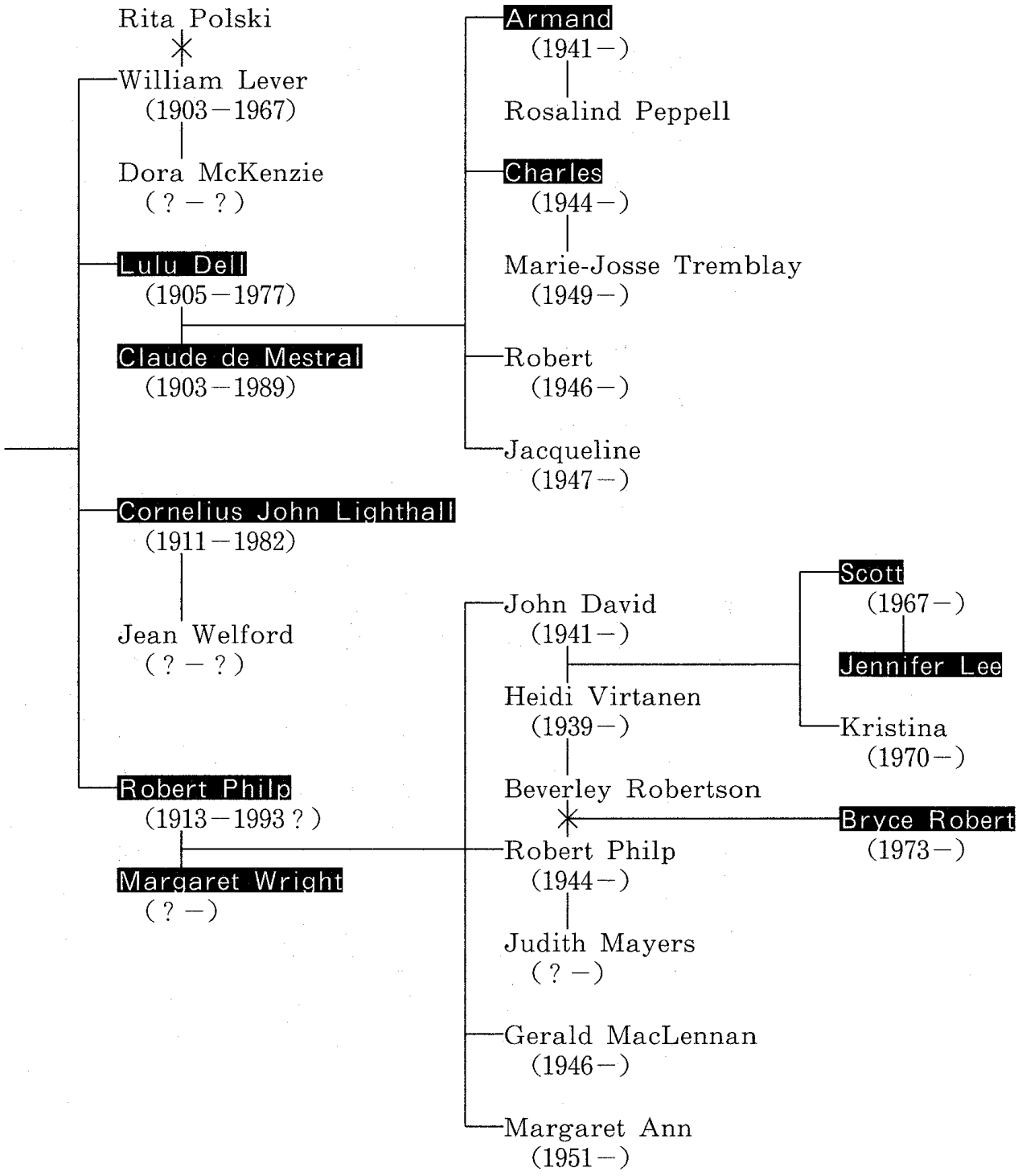
ミーを卒業し、カナダに帰っていたこの末っ子を日本に呼び戻したのである。ベーツ館の裏庭で、院長室から運び出したアンダーウッドのタイプライターを使って、父親の語る先祖の歴史をロバート・ベーツ氏は書きとめていった。そして、あの夏の日から四二年が経った。ロバート・ベーツ氏はそれ以降の歴史を書き足し、最後に自分のことを書き加え、この小冊子を完成させたのである。

トロントのスコット・ベーツ氏宅には、ベーツ家の歴史を書くために、その祖父ロバート・ベーツ氏が集めたであろうと思われるかなりの量の資料が残されていた。ベーツ元院長を知るための貴重な資料である。この資料についても、スコット・ベーツ氏は複写して送ると言ってくださった。

Newcomers in a New Land のおかげで、カナダ移住後のベーツ家の家系図は描きやすい。学院史資料室には、一九九六年一一月にロバート・ベーツ氏の孫の一人、ブライス・ベーツ氏がこの小冊子を参照して作成したと思われる家系図がある。それに今回の訪問で新たに確認できた事項を書き加えることができた。家系図の全体はかなりの大きさになるが、ここでは便宜上、今回の出張に関わりのあった関係者のみにしぼった家系図をまとめておきたいと思う。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

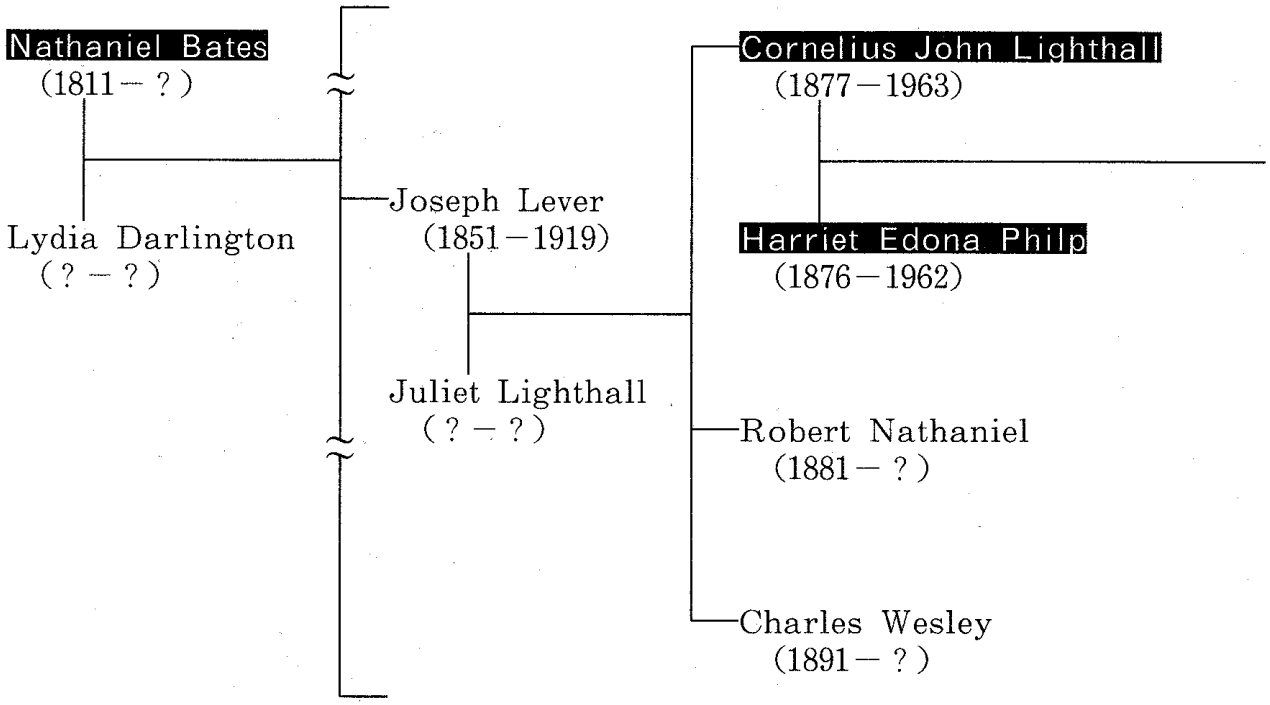


NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ベーツ家家系図（部分）

文中に登場する人物は反転文字で示している



NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

8　関係者との懇談

モントリオールでの二日目の夜、アルマン・デメストラル氏は、弟のチャールズ・デメストラル氏一家とディビッド・ウッズウォースご夫妻を自宅に招いて私に紹介してくださった。

チャールズ・デメストラル氏は、ベーツ元院長がトロントに住んでいた頃、トロント大学の学生だったため、しばしば祖父の家を訪れていたそうである。ベーツ元院長はその時、よくすき焼きを作ってくれたと教えてくれた。実は、すき焼きはベーツ元院長の大好物であった。ある時、中央講堂下で行われた新聞部のすき焼きの会に顧問の先生と一緒に招待され、「こういうこと（顧問の先生をすき焼きに招待すること）はコモンセンセイ（＝コモン・センス）にしてください」と大喜びされたとの逸話が残っている（『母校通信』三一号（一九六四年五月一日発行）[CE/7] 四一頁より）。

アルマンとチャールズは日本で生まれ育った母親に育てられただけあって、日本に対する知識も豊富である。お箸の使い方など母親からどのように教わったかを説明してくれた。関西学院のキャンパスで育った宣教師の子供達はカナディアン・アカデミーに通っていたため、同じ年頃の日本人の友達ができにくく、また、当時は日本語を教えていなかったので日本語もあまり上手にならなかったらしい。しかし、二人の母親ルルは、東京で生まれ、関西学院に来るまでは甲府で育ったこともあって、ベーツ元院長の四人の子供の中で一番日本語ができたそうである。

ディビッド・ウッズウォース氏は初代法文学部長H・F・ウッズウォース氏の次男であるが、私にとっては、ベーツ元院長による油彩画やガウンを寄贈してくださった方としての印象が強い。というのも、正直言って今回の訪問に際して、ベーツ元院長のことを調べるのに手一杯で、ウッ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ズウォース初代法文学部長について調べる時間がなかったのである。在職中に急逝したこと、ベーツ元院長と親しかったこと、『文学部回顧』(一九三一年一月一日発行)[EA] の背表紙の題字を筆で書いたこと、戦後になって寿岳文章元文学部教授により *In Memoriam Harold Frederick Woodsworth D.D.*[S/2/WHF] が書かれたこと等を知っているに過ぎなかった。

食事の前に私を紹介されたディビッド・ウッズウォース氏から私への最初の質問は衝撃的だった。「マクドナルド・カレッジのスクール・モットーを知っていますか?」ちょうどその日の午後訪問したマギル大学資料室で、それが関西学院のスクール・モットー、マスタリー・フォア・サービスと全く同じであることを知ったばかりの私は、即座に「ベーツ先生は関西学院のスクール・モットーを提唱された時、マクドナルド・カレッジのスクール・モットーをご存知だったのでしょうか?」と問い返した。ウッズウォース氏の回答は、「ベーツ先生はマクドナルド・カレッジのスクール・モットーをマネされたのです」。

マギル大学名誉教授のウッズウォース氏がマギル大学のことに詳しいのは当然である。さらにウッズウォース氏は、宣教師の子弟として、原田の森と上ケ原で育っている。ベーツ元院長の長女ルルとは原田の森時代からの親友である。そして、その父親同士はカナダ人宣教師として特別に親しく、助け合って現在の関西学院の礎を築きあげた。ウッズウォース氏は、原田の森時代にニュートン院長夫人に可愛がられたこと、ベーツ夫人が脳溢血で倒れ大騒ぎになった日のこと、ベーツ元院長が日本語はローマ字しか書けなかったと思われること、宣教師の子供達はベーツ夫人のことは愛称で「ハティおばさん」と呼んでいたが、ベーツ院長のことは威厳をもって「ドクター・ベーツ」と呼んでいたこと等を話してくださった。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

会話の途中、アルマン・デメストラル氏は、一冊のアルバムとファイル（デメストラル氏へのお礼に、関西学院で所蔵しているベーツ元院長関係の写真や書類をカラーコピーし、英語で簡単な説明を付け、さらに現在のキャンパスの中でベーツ元院長を偲ばせるものや場所の写真を撮ってまとめ、今回持参したもの）を皆に紹介してくれた。その中に図録『関西学院の１００年』（一九八九年一一月一日発行）掲載の写真「カナダ・メソヂスト・ミッションの宣教師たち（一九二二年）」を入れておいた。ベーツ元院長一家を始めとするカナダ人宣教師の家族の集合写真である。ウッズウォース氏は大変なつかしがり、その中に写っている一番幼い子供を「これが自分である」と指し示された。そして、もっと大きくしたものがあれば、この写真に写っている全員の名前を言えるだろうと言われた。その他の写真や記録からも次々に話が展開し、有意義な懇談の場となった。

ウッズウォース氏は、自分の父親の残したものもたくさんあったが、兄や姉たちが持っていた物はその家族により散逸してしまった、日本から調べに来てくれるのだったら残しておけば良かったと残念がっておられた。そして、ぜひウッズウォースのことも調べてほしい、と言われ、最後に日本語で「また来てね」とニッコリ微笑まれた。

Ⅲ　その他の資料について

1　マウント・アリソン大学資料室

トロントから空路約二時間でニュー・ブランズウィック州モンクトンに到着する。そこで私は、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

マウント・アリソン大学副学長ピーター・エナルズ氏の出迎えを受けた。モンクトンから同大学のあるサックビルまでは車で三〇分程の距離である。関西学院大学に客員教授として来られた経験のあるエナルズ氏は、山内一郎院長から前もって私の訪問の連絡を受け、ご夫妻で面倒をみると申し出てくださっていた。幸い、夫人のチェリル・エナルズさんは大学アーキビストとして働いておられ、資料室の所蔵物や仕事について説明をお聞きすることができた。

マウント・アリソン大学は、アウターブリッヂ第七代院長（院長在任一九五四―五六年）が卒業した大学で、当時の記録を調査することも訪問の目的の一つであった。アウターブリッヂ元院長関係の資料は数量的には限られており、そのほとんどは、小林信雄名誉教授と山内一郎院長が一九八九年に訪問された際、複写させていただいていた。今回は、その後整理が進み、新たにみつかった資料を中心に見せていただくことができた。ここで特に興味を引かれたのはマウント・アリソン女子大学発行の *Allisonia* である。卒業生の住所、結婚、出生、死亡に始まり、宣教師からの手紙や学生のクラブ活動の様子まで、あらゆる記録が載っている。アウターブリッヂ元院長夫妻が過ごした学生時代の様子も知ることができる。資料室には、*Allisonia* の索引があり、姓や主題から記事を検索できるようになっていた。今回は短時間の訪問だったため、この索引を使いこなす時間がなかったのは残念である。資料室が保存する当時の写真から、若い頃のアウターブリッヂ元院長が驚くほどハンサムであったこともわかった。と同時に真面目な学生であったようだ。このことは、マウント・アリソン大学資料室のご好意で複写・製本していただいた、アウターブリッヂ元院長の修士論文 "The Evolution of Monotheism"（一九〇九年）からも推測できる。

マウント・アリソン大学では、ほとんどの時間をチェリル・エナルズさんと過ごした。その中

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

で、カナダにおける資料室の仕事や、マウント・アリソン大学資料室での仕事の進め方についてお話をうかがうことができた。マウント・アリソン大学の創立は一八三九年まで遡ることができるが、資料室の正式な発足は一九六九〜七〇年にすぎない。現在は、図書館の一部として位置づけられており、アーキビスト一名（半日勤務・年間一二カ月契約）とアシスタント一名（終日勤務・年間八カ月契約）が働いている。幸い、同資料室は未整理資料を整理する短期プロジェクトのための補助金を獲得することに成功してきた。これは、連邦政府がスポンサーとなり、州の資料協議会を通じて運営されているプログラムで、Canadian Council of Archives Control of Holdings Program を通して実施されている。

資料室の仕事として、資料の整理・保存と共に、古い記録に関する問い合わせを受けることもかなり多い。記録へのアクセスは、資料室が作成した目録、一覧表、索引、ガイド等を使って行われている。マウント・アリソン大学資料室には、教職員の姓から検索できる索引がある。これは、大学創立以来の全教職員の目録で、大学要覧を基に作られており、毎年更新されている。資料保存のため、大学評議会記録、学長の年次報告、学位授与式のプログラム、大学要覧（講義内容）、学生新聞がマイクロフィルム化されている。

資料室の利用者は、主に同大学の職員、教員、学生であるが、他大学の研究者や報道機関、地域からの問い合わせも全利用者の三分の一にのぼっている。一年間に約三五〇人の研究者を受け入れており、電話、手紙、電子メール、ファックスによる問い合わせは六〇〇件にも及ぶ。

また、最近、カナダのアーキビストは、カナダ中の資料室の基準となる Rules for Archival Description (RAD) を作成したそうである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

カナダでの資料調査のスタートとして、マウント・アリソン大学での経験は、その後の調査の支えとなった。ピーター・エナルズ氏は自宅で、トロント大学のヴィクトリア・カレッジで学部生だった頃の写真を見せてくださった。そこにはモントリオールでお目にかかる予定のチャールズ・デメストラル氏が写っていた。また、父上は、ベーツ元院長の葬式を執り行ったバーナード・エナルズ氏である。少年の頃住んでいたのは、アウターブリッヂ元院長の息子ラルフ・アウターブリッヂ氏が医院を開業していたブリティッシュ・コロンビア州ウェストミンスターであった。ラルフ・アウターブリッヂ氏は、吉田松陰の脇差し返還で一九八八年に新聞・テレビ等で騒がれたことで有名である。一九八六〜八七年にカナダ研究客員教授として来日された時、それまで別々の出来事として認識していたこれらが関西学院を通してひとつにつながり、エナルズ氏自身も驚かれたそうだ。これも関西学院とカナダとの深いつながりを示す一例である。

2　マリタイム地区カナダ合同教会資料室

小林信雄名誉教授から、地区毎に発行される教会誌の存在について聞いたことがあった。ということは、マリタイム地区の教会誌を調べれば、当地区出身のアウターブリッヂ元院長の書いた記事や論文がみつかるかもしれない。学院史資料室配属になって二年目の私は、アウターブリッヂ元院長の書いた文章に十分目を通しているとは言えないが、正式の記録、報告書以外のものに人の知らないちょっとおもしろい話を書き残す人という印象を持っている。幸いマリタイム地区カナダ合同教会資料室は、つい最近ハリファックスからサックビルに移って来ていた。日本から書き送ったものがみつかるのではないかという期待を持って、同資料室を訪れた。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ところが、資料室に入った私の目に最初に飛び込んできたのは、ベーツ元院長だった。正確に言うと、額に入れ壁に掛けられている百人以上もの宣教師の集合写真中のベーツ元院長の顔である。写真のタイトルは、「第一回マリタイム年会（於サックビル）一九二五年九月一日～四日」となっていた。そして、写真の横には、一人一人の氏名が記入されているものも掛けてあった。ベーツ元院長の顔の所を見ると、空白のままである。マリタイム年会に所属していないベーツ元院長は、おそらくゲストで参加したものと思われるが、そのため顔を確認して氏名を書き残すことのできる人がいなかったのだろう。念のため、当時の記録 *The United Church of Canada Minute of the First Maritime Conference* を出してきてもらった。九月三日に行われた「外国伝道」の第七セッションの所に、確かにC・J・L・ベーツの名がある。日本での働きについて報告したらしい。詳しい報告の内容がわかるものはないかと、他の資料にも当たってみたが、残念ながら見つけることはできなかった。

一九二五年五月二〇日から翌年二月二〇日までカナダに帰国中のベーツ元院長は、九月はじめにサックビルを訪問していた。その七四年後の同じ九月、サックビルを訪れた私は資料室でベーツ元院長の顔を確認し、空白だった箇所にその氏名が書き加えられることになった。今回のカナダ訪問で、資料や情報を与えられるばかりだった私が役に立つことのできた数少ない場面の一つである。

ところで、マリタイム地区で発行されていたのは、*The United Churchman* だった。カナダ合同教会は、一九七〇年代に各地区毎での発行を取りやめ、全国誌一誌にまとめたため、同誌は既に廃刊になっている。全体を通しての索引があるわけではなかったが、担当のジュディス・コ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

ルウェルさんは前任者キャロライン・アールさんが書き残したと思われるメモ帳を繰って、アウターブリッヂ元院長の書いた記事を何点か探し出し、コピーをとってくれた。それらは、戦争に向かいつつある日本の状況や日本の失業者問題について書かれていた。他の宣教師についても、その出身地の資料室を調べれば、このような資料を見つけ出すことができるだろうと思われた。

3　カナダ合同教会資料室（トロント）とグェン・ノルマンさん

カナダ訪問に際して、アルマン・デメストラル氏からトロントにあるカナダ合同教会資料室に寄るよう勧められた。カナダ合同教会資料室は、トロント大学のヴィクトリア大学と共同の資料室になっている。出発前にホームページにアクセスしてみると、そのトップページに「資料室へようこそ！（略）ヴィクトリア大学は日本の関西学院大学となぜ特別な関係があるのでしょうか？答えは資料室にあります！」と書いてあった。いかにも関西学院に関する資料が豊富にありそうだ。実際、既に大量の資料が小林信雄名誉教授や山内一郎院長により複写されている。したがって、新たな資料を入手すると言うよりも、膨大な資料がどのように整理されていて、どのようにアクセスできるのかということを見てみたいと思った。

カナダ合同教会資料室で日本をはじめとするアジア伝道関係の資料を整理されたのは、グェン・ノルマンさんである。ノルマンさんは一九四七年から一九五九年まで文学部・神学部教授をされていたハワード・ノルマン教授の夫人である。カナダ帰国後、カナダ合同教会資料室の資料を使ってご夫妻で書き上げられた *One Hundred Years in Japan 1873-1973*（一九八一年発行）[AA/8] を読んでいた私は、ぜひお目にかかりたいと考えていた。小林信雄名誉教授達が一九

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

八九年に訪問された時は、まだ資料室での資料整理が完了していなくて、ノルマンさんに大変お世話になったと聞いている。幸い、日本から差し上げた手紙に「一〇月には九〇歳になります。すっかり歳をとってしまって、お役に立てるかどうかわからないけど、お会いしましょう」との返事をいただくことができた。モントリオールからの列車でトロントに到着した私は、タクシーでノルマンさんの住む老人ホームに駆けつけたのである。ノルマンさんは日本から持ち帰られたものに囲まれて暮らしておられた。そして、私のためにおいしい日本茶をいれてくださった。

一九三二年から日本に滞在していたノルマン夫妻は、一九四〇年一二月にベーツ元院長夫妻と同じ船で日本を後にした。ノルマンさんは、神戸港での感動的な別れの様子を *The United Church Observer February 1,1941* に書いておられる。ベーツ元院長の家族とも親しくされていたので、私の質問にも明確に答えてくださった。ノルマンさんの出身がモントリオールのマギル大学であることを思い出した私は、マスタリー・フォア・サービスについても質問してみたが、マクドナルド・カレッジのスクール・モットーについてはご存じなかった。

ところで、ノルマンさんはカナダ合同教会資料室所蔵のアジア関係の資料には当然熟知されているが、ベーツ元院長の個人的な書類に関しては一切目にしたことがなく、亡くなった際、遺族により処分されたと思っておられたようである。今回私がモントリオールで目にした資料のことをお話しすると、「時が来れば、すべてカナダ合同教会資料室で保管されるべきです」ときっぱり言われた。

ノルマンさんとの会見の翌日、カナダ合同教会資料室を訪問した私は、いたるところでその名を目にすることになる。コンピューターで役に立ちそうな資料を検索し、持ってきてもらうと、

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

その資料の表紙には、“Finding Aid 74' United Church of Canada, Board of World Mission, Japan Mission, 83.014 C Prepared by Mrs. Gwen Norman Edited 1990” というように書かれているのである。書簡にしても、一通、一通大まかな内容が書き出してあり、全部読まなくても内容がわかるようになっている。ベーツ元院長関係の資料もすべてこのように丁寧に英語で目録がとられ、入力され、保存されれば、世界のどこからでも研究者が利用できるようになるだろう。ノルマンさんの偉大さがしみじみ理解できたと同時に、ここはまさしく資料の宝庫であると思われた。入室の手続きをする際にも利用予定期間を尋ねられた。半日や一日では、ただそのすごさに圧倒されるだけで終わってしまうだろう。

小さな事だが、カナダ合同教会資料室でも私の知識が役立ったことがある。ベーツ元院長の名をコンピューターに入力して検索したところ、略歴が表示された。関西学院の院長在職期間に関する記述の中に不正確な表現を見つけ、訂正を申し出たのである。関西学院で働く者にとっては明確な事項がカナダ側から見れば確認しにくいことなのかもしれない。情報は、ひたすら書類を繰ったり、本を読んだりすることからだけ得られるのではない。知っていることや疑問に思っていることを口にしてみることにより得られる情報もある。情報交換や交流、人とのつながりから得られることの多さを改めて思い知らされたような気がする。

Ⅳ　終わりに

今回の出張では本当に何人もの方にお世話になった。特に、アルマン・デメストラル氏のご親

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

切とご配慮にはお礼の言いようもないほどである。トロントでスコット・ベーツ氏宅を辞去する際、「アルマンはカナダで最も忙しい大学教授だと思う」と言われた。確かに法学部教授として朝八時からの講義があるかと思えば、赤十字総裁としてスイスとカナダを飛び回っておられる。日本から訪れた私のたどたどしい英語に辛抱強く耳を傾け、自宅に泊まらせ、関係者を紹介し、列車の時刻を調べ、空港や駅への送り迎えをしてくださった。そして、「祖父（ベーツ元院長）から日本の話をたくさん聞いている。少しでも、祖父の愛した関西学院の力になりたいと考えていた」と言ってくださった。愛情深いベーツ元院長にとっても、一人娘の産んだ子供は特別にかわいかったことだろうと思われる。

一九八七～八八年のカナダ研究客員教授スティーブン・ケニー氏が、*Kwansei Gakuin University Annual Studies Vol.37*（一九八八年一二月発行）[KA/7] に書いた "Kwansei Gakuin and the Canadian connection: An historical reflection on a unique relationship" と題する論文（田淵結文学部教授による和訳「関西学院とカナダ：その独自の関係に関する歴史的考察」[AA/8/KS] が『キリスト教主義教育研究室年報』一八号（一九九〇年一一月発行）[BI/7] に掲載されている）は次のように始まっている。「関西学院はカナダ人およびカナダと長い関係を保っている。この論文の目的は、この関係を考察し、カナダ人の果たした役割の性格を論じ、さらに学院において彼らが担った重要な教育的役割の歴史的意味を回顧することにある。関西学院の歴史は、本質的には日本の学校の発展の歴史である。経営者、教師、学生および卒業生は日本人である。カナダ人の参画は、初期においては重要なものであったとしても、やがてわずかとなり今やほとんど無くなってしまった。今日、彼らの存在の跡は残っているものの、もはやカナダ

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

人は学校の重要な構成員ではありえない。関西学院の現在のこの現状は、私のような歴史家を本当に困惑させる。私の日本語の知識はほとんど無に等しく、乱暴に言えば、大学内における主要な日本人による展開についてのアプローチは不可能だからである。その結果、以下の資料は実はもっと大きな現実のなかのごく小さな部分にのみ関する歴史的論述として読まれるべきものなのである」。

つまり、関西学院の戦前の公式記録の多くが英語で書かれているにせよ、関西学院が日本にあり、そこに関わった人間の多くが日本人である以上、日本語で書かれた資料に対する理解は必要不可欠である。カナダ側にどんなに多くの英文資料があったとしても、それだけでは不十分である。カナダのベーツ元院長関係者には日本語の資料は読めない。私達が当たり前のように読んで知っている事実ですら、知られていないことがある。カナダで、『関西学院百年史』に書かれていることや、卒業生・教職員がベーツ元院長に関して書いていることなどかいつまんで話したところ、大変興味を持ってくださった。この「カナダ訪問記」にしても、このように日本語で書く限り、一番お世話になったカナダの方々に読んでいただくことはできない。ところが、英語で書けば、それを読んでカナダ側からまた新たな情報がもらされるかもしれない。さらに言えば、ベーツ元院長関係者から得た資料を使って何らかの研究論文が書かれ、それが英訳されカナダに紹介されれば、それに対するフィードバックが必ずあるはずである。

正直なところ、このような出張は初めての経験だったため、帰国してから、「あの写真を撮ってくるのを忘れた」「これを見てくるのを忘れた」「ああすれば良かった」「こうすれば良かった」と思うことばかりである。史学科の卒業でもないし、学院史資料室での経験も浅いので、実際の

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

資（史）料を前にしても、どこから手を着けたらよいのかわからない。時間が限られていたとか、日本語が通じないとか、言い出せばきりがない。しかし、とにかく現地に行って、自分の目で見て聞いてみる、目や耳だけでなく、五感全てを働かせてみるというのはすばらしいことである。それだけは確かに理解できた。

思い起こせば、学生の英語研修引率で、初めてトロント大学を訪れたのは一九九三年であった。トロント大学の担当者と話をしている時、私達の会話の中の「関西学院」という単語を聞きつけて、ある教授が突然私に話しかけてきたことがある。「あなたは西宮市にある関西学院の方ですか。一八八九年に米国南メソヂスト監督教会のW・R・ランバスが創った時は、原田の森にありましたね。カナダのメソヂスト教会の経営参加は一九一〇年でした。カナダ人宣教師の院長としてベーツ、アウターブリッヂの二名がいましたね。その他にも……」。あっけにとられている私をおもしろがってか、その先生は次々に話しかけられた。そして、言いたいことだけ言って去って行かれたのだった。

後で聞いたところ、トロント大学の神学部教授で、カナダの外国伝道が専門とのことであった。お名前を覚えていないのが残念だが、自分の母校であり、卒業後もずっと働いている関西学院の歴史など考えたこともなかった私には、強烈な印象となって残っている。その後何年か経って、今度はあの時名前を挙げられたベーツ元院長の関係者に会いにカナダに行くことになった。いつかあの時の先生とも再会して、今度は私の方から知っていることを次々に話して驚かせてみたいものである。

NII-Electronic Library Service

Kwansei Gakuin University

【参考文献】

直接引用したものは文中にて示した。ここでは、文中で示さなかった参考文献を挙げる。なお、学院史資料室にて登録されている文献・資料等に関しては、[ ]内に同室の分類番号を記入している。ただし、年史・図録の分類番号は省略した。

『関西学院百年史』一九九四年～九八年

『関西学院七十年史』一九五九年

「関西学院年次報告」[AD/7]

一柳米来留著『失敗者の自叙伝』　近江八幡市　近江兄弟社　一九七〇年　[Z/2-8/VWM]

『来日メソジスト宣教師事典　一八七三～一九九三年』　東京　教文館　一九九六年

『新日本地名索引』　鎌倉　アポック社出版局　一九九三年

『日本歴史地名大系』　東京　平凡社　一九八七年

The Canadian Encyclopedia. 2nd ed. Edmonton: Hurtig Pub.,1988

American Universities and Colleges. 15th ed. New York, Berlin: Walter de Gruyter,1997

【追　記】

カナダでお世話になった方々のために、この報告書は英文でも作成している。英文報告書の作成に当たって力になってくださった、次の方々のご協力・ご指導に心から感謝する。

関西学院大学ジュディス・ニュートン文学部教授は、常に一番最初に目を通し、数限りない誤りを指摘し、多くの助言と励ましを与えてくださった。マウント・アリソン大学資料室アーキビスト、チェリル・エナルズさんは拙い英文に注意深く目を通し、専門用語を使った英文報告書の書き方を教えてくださった。マギル大学ディビッド・ウッズウォース名誉教授は、私の聞き間違いを指摘し、曖昧な表現を訂正してくださった。関西学院大学国際交流部マイケル・クィグリー氏には文法上、語法上のチェックをお願いした。

NII-Electronic Library Service